

日本の伝統的な自然観を 地球の未来社会に生かす

日本人のノーベル賞受賞科学者の多くから「日本人だったからこそもたらした」という言葉を聞いている。この意味は、欧米の研究者にはない日本人固有の発想と独創性があったから評価されたということである。では、それはどこからきているのか。

日本列島は、四季折々に変化するモンスーン気候や山と谷、平野、海岸などが複雑に入り組んだ地形、そしてそれらによる多様な生態系に恵まれている。一方で、地震、津波、火山、台風などの自然災害にも悩まされてきた。このような自然を生かしながら、あるいは折り合いながら、私たちの祖先は縄文のころから水田稲作農業を築き上げてきた。この水田稲作は、自然のある程度を改変しつつも、その恵みを受けながら、里山という人為的な自然の仕組みとして、里山という人為的な自然とそれに伴う文化を築いてきた。そ



安成哲三
総合地球環境学研究所所長

の過程で、まさに「自然とともに生きる」という考え方が日本人には当たり前のものとして培われてきた。

約2700年続いた江戸時代の鎖国は、限られた資源や自然の恵みをいかに無駄なく持続的に活用するかという工夫がなされ、江戸や大阪・京都という都市を含め、自然の循環の中で生きていく知恵と思想がさらに培われたといえる。このように日本人の自然観は、欧米人とは異なる発想を生み出す源になっているとも考えられる。

自然と一体になって日本人が生きてきたことを示す文化の一つが俳句である。

の過程で、まさに「自然とともに生きる」という考え方が日本人には当たり前のものとして培われてきた。

約2700年続いた江戸時代の鎖国は、限られた資源や自然の恵みをいかに無駄なく持続的に活用するかという工夫がなされ、江戸や大阪・京都という都市を含め、自然の循環の中で生きていく知恵と思想がさらに培われたといえる。このように日本人の自然観は、欧米人とは異なる発想を生み出す源になっているとも考えられる。

自然と一体になって日本人が生きてきたことを示す文化の一つが俳句である。

に大気・水汚染などの公害問題を引き起こすことになった。現在、さまざまな環境問題を克服しつつ、より人間らしく生きるための「持続可能な開発」という概念が提唱されているが、人間と自然の対立関係を前提とした近代科学の発想のみでは、根本的な解決ができないと思われない。人間も地球の自然の一部として、他の生物と共に生きる存在であるという、日本の伝統的な自然観を、如何に科学技術に生かす持続可能な社会を作ることができるか。地球社会における私たち日本人の役割が今、問われているのではない。



●やすなり・つぞろ
1947年、山口県生まれ。京都大学理学部卒業。筑波大学地球科学系教授や名古屋大学地球水循環研究センター教授などを歴任後、2013年、総合地球環境学研究所所長に就任。専門は気候学・気象学。現在は、地球環境を包括的に調査分析する地球環境学の分野でも活動。秩父宮記念学術賞、水文・水資源学会国際賞など受賞多数。

生きる知恵を与えてくれた 何の目的もなく集まり過ぎる時間

イチヨウの葉が一枚落ちて、秋から冬に街は急速に彩りを変えていく。何か昔と違うような人々を見ている。昔の町並みかと思いついてみて、それが人々の集まり方だと思いついた。私が子ども時代を送った1950年代は、どこでも人々がよく集まった。冬になれば、道に降り積もった落ち葉を掃いて集め、焚き火をして人々が



山極寿一
京大総長

多かった。そこに何となく人々が寄り合い、四方山話が交わされる。子どもたちは焚き火にあたりながら、大人たちの間に交じってその話を聞いていたものだ。たいがいは近所の噂話で、この家で何が起きたか、どの店が何が売り出されるかなど、たわいもないことばかりだ。でも、そういった話を聞きながら、自分が住む社会の様子を頭に描き、ほのぼのと温かい気持ちにな

ったものだ。

それは今考えてみると、人々に安心や信頼を与える装置であったように思う。近所に住んでいる人々がどんな性格なのか、世間の動きにどんな関心を持っているのか、新しい出来事はどう対処しようとしているのかを知る、絶好の機会だったのである。子どもたちはその噂話を学ぶことができた。日々引き起こされる問題に自分がどう取り組むべきかを、大人たちの態度を通して知ることができた。

現代でも人々はよく集まる。でもそ

れには目的があることが多い。お目当ての品物を手に入れるため、評判の料理を食べるため、イベントを見るためなど、魅力的なものやことに引き付けられて集まっていく。何となく集まっていたことがなくなってきたような気がする。

今の時代、情報は人から人へと伝えられるものではなく、インターネットを用いれば、ほしい情報はいつでもどこでも手に入る。携帯電話やメールを使って、どこにいても友人と話ができる。しかし、それによって生きているために必要な情報は得られていない。



●やまぎわ・じゅいち
1952年、東京生まれ。京都大学理学部卒業。京都大学理学部教授を経て、2014年より京大総長。理学博士。アフリカ各地でゴリラの行動や生態をもとに初期人類の生活を復元し、人類に特有な社会特徴の由来を探っている。著書に「家族進化論」(東京大学出版会)、「ゴリラは語る」(講談社)、「サル化する人間社会」(集英社)など。

自然はひとりりで動く 人為を超越する

未来を考える。考えようとする。これは人がよくやることである。何事もそうだが、これにも陰陽がある。あるいは表裏がある。

なぜなら未来には、考えられる未来と、考えもしなかった未来があるからである。戦前の常識で、戦後が想像できたであろうか。小学生がスマホを持



養老孟司
京都国際マンガミュージアム館長

って歩く時代、会社のオフィスがパソコンで埋まっている状態を、だが戦前に想像したであろうか。

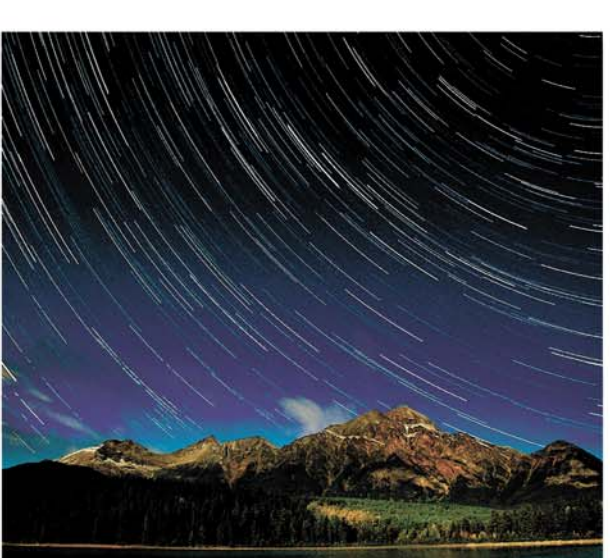
考えるのは人の意識で、意識には限度があるいは枠がある。意識は自分の枠を超えるものを想像できない。でも現代に生きていくと、意識が捉えることだけが未来になる。ああすれば、こ

なる。こうすれば、ああなる。それは意識の作業である。でもそこには「いつの間にかこうなった」ということは含まれていない。

例えば人口減少はその一つであろう。だれも日本人を減らそうと意図したわけではあるまい。まさに「いつの間にか減ることになった」。意識のみで世界を見ると「いつの間にか起こる」ようなことが抜ける。でもその意識自体はいつの間にか生じて、いつの間にか消える。自分の意識がいつ生じて、いつ消えるか、確言できる人は誰もいない。意識自体は意識で左右できない。

それを教えてくれるのは誰か。自然である。技術は意識が動かす面が大きい。例えば機械なら「こういうものを創ろう」と意図するからである。自然の意図は読めない。ひょっとすると、こうなるかもしれない。でもああなるかもしれない。そう想像するだけである。その想像が当たるとは限らない。

現代科学は技術優先になった。ノーベル賞ですら、京都賞ではないのに、技術に与えられる。技術は「人のつくり」で動く。でも自然はひとりりで動く。大げさな言いなら、人為を超越する。時々そういうものに目を向けよう。



●ようろう・たけし
1937年、鎌倉生まれ。62年、東京大医学部卒業。同大助手、助教授、教授を経て95年退官。東京大名誉教授。退官後は著作・講演活動のほか、昆虫特にゾウムシの採集、分類に没頭する。

ブータンの生活の中に 日本人の「幸せ感」につながるもの

2010年、京都大学とブータン国立大学との間でブータン友好プログラムという交流事業がスタートした。経済指標でみれば発展途上国ということになるのだが、ブータンを訪れるその文化に触れた日本人は、老若男女を問わず、何とも言い難い「なつかしさ」を感じるという人が多い。私も、訪問団のメンバーとして初めてブータン



吉川左紀子
京都大学こころの未来研究センター教授・同センター長

訪れて以後、ヒマラヤの中腹に位置するこの小国の持つ引力に引かれ、何度も出掛けては、その「なつかしさ」の正体を考えている。ブータンの人たちの毎日の生活の中に、日本人が感じる「幸せ感」につながる何が、潜んでいるように思えるのだ。

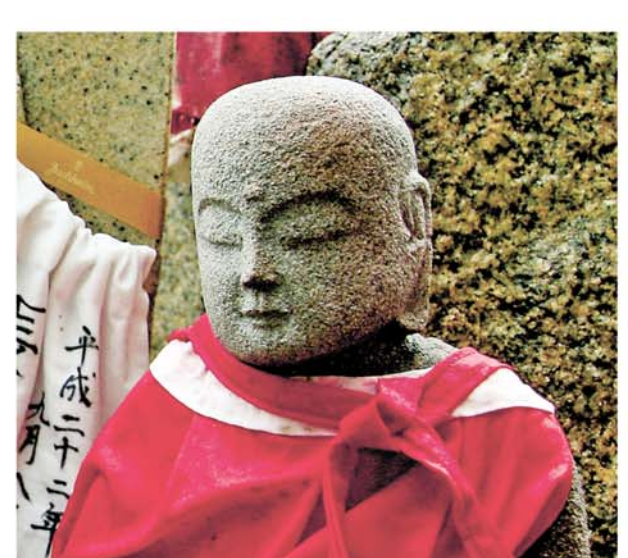
ブータンの民家を訪ねると、どこかにも立派な仏堂がある。家の人たちが

は、毎朝仏様の前に置かれた小さな器の水を替え、家族や先祖、子孫の幸福を祈るといふ。清潔だが質素な造りの家の中にあつて、供え物に囲まれた仏像が安置された仏間は、他の部屋とは異なる「聖なる場所」の趣がある。ブータンの人たちが先祖を思う、あるいは家族の幸福を祈る時間の大切さが、そうした佇まいから伝わってくる。

北海道の製紙工場の社宅で生まれた私は、これまで仏間や仏壇のある家に住んだことがない。それでも半世紀以上前、工場横に並ぶ小さな社宅にも、座敷には一畳ほどの床の間があり、そ

こは他の場所とは異なる特別な空間だった。床の間の前に正座して、母が花を生け、掛け軸を替える様子を見ていた幼少のころ、「床の間にあがつちやいけませんよ」としつけられた記憶がある。子ども心に、床の間の前に座るときはちよつと緊張する感覚は、今もよく覚えている。

現在、私が住んでいるマンションには仏間も床の間もなく、「聖なる場所」に近い空間はない。ブータンから戻ってくる時、それが何となく物足りなく感じられるようになった。そこで、玄



●よしかわ・さきこ
京大こころの未来研究センター教授・センター長。京大大学院教育学部教授を経て2007年より現職。専門は認知心理学、認知科学。共著書に「よくわかる認知科学」「心理学概論」ほか。